

『グリム童話』にみる個性化

—「白雪姫」と「ふたりの旅人」—

太田隆士

第1章 メルヘンと深層心理学

第1節 個性化

個性化 (Individuation) という言葉は、日常生活でも用いられるものであるが、ユング心理学における重要なキーワードでもある。個性化とか自己実現 (Selbstverwirklichung) と言われる。

人は生きていく過程において、親とりわけ母親から離れていくという大きな歩みを踏み出すものであるし、社会のなかで生きていく際には、その社会に適応しようとするものである。そこでは意識的に振る舞おうとするわけであるが、その際に無意識に抑圧する (verdrängen) ものも当然のことながらある。この抑圧された内容も、意識化され、意識的に保持されうるということも考えられる。こうした内容が、意識に加わるとき、自己認識の深化をもたらすのであり、俗にいう度量の広い人間となる。しかし無意識は、個人的なものだけであるわけではなく、例えば「神さま」というような、誰もがもち、個人に帰属するものとは別の、個人的ではない (unpersönlich)、共通の (allgemein)、普遍的な (universal)、あるいは集合的な (kollektiv) ものもあると考える方が真理に近いであろう¹⁾。

「無意識を意識に同化する過程は、注目すべき現象をよび起こす²⁾」。そうした現象としか理解できないような出来事がメルヘン (昔話) には描かれている。そもそもメルヘンの成立は、例えば夢によって「無意識を意識に同化する」ことにより、おそらくは強い感情をともなって語られ、語り継がれたことにあるのであろう。「白雪姫」(Sneewittchen, KHM53)³⁾の主人公である幼い少女にとって、母親とは、当初はそのもとに休らうことのできる美しい母親であったのだが、成長とともに、白雪姫を殺そうとさえしていると思われる魔女にまでなった。一方、成長したある若者は、青年となり、社会のなかで生きていく過程で、自分自身のなかにもまったく対照的な性格が存在することに驚きをもって、気づくことになるかもしれない、言葉を換えれば、自らの内面に擬人化された「ふたりの旅人」(Die beiden Wanderer,

KHM107) がいることに気づくことがあるのかもしれない。

第2節 メルヘンと夢

メルヘン(昔話)はたしかに不思議な内容からできている。昔話研究者のリュティは、「昔話の起源についての問いはつねに新たに提起されている。中核となる問題はいまだに解かれておらず、いくつかの仮説が対立している。しかし今日では、『グリム童話』はすべてのひとに手に取られている。他方おなじようにグリム兄弟によって編集された『伝説集』は、一般にはほとんどしられていない⁴⁾」と論じている。リュティは伝説や小説と比較することにより、昔話の特質を明らかにした。

その一つに「一次元性」(Eindimensionalität)がある。「ふたりの旅人」にしゃべる馬や蜂や鴨等が描かれているが、それらは別の世界に属するものではなく、旅人が生きている日常の世界と地続きであり、同じ次元に属している。このように彼岸の世界と此岸の世界とが異質の次元ではなく、一次元で描かれていることに、昔話の特質があり、えもいわれぬ魅力を産み出しているのである。

その昔話の一次元的な世界は、同時に奥行のない、平面的なものであり、そこに登場する人物たちも実体性のない、内面的世界ももたない「図形」(Figur)なのである。白雪姫の住んでいるお城も七人の小人の家もそこにあるだけであり、どのようにして建てられ、年月を経てきたものかということなどは読者にはいっさい説明されない。また白雪姫はかざり紐で首を絞められたり、毒の櫛や毒の林檎で殺されてしまうが、あるきっかけでいともかんたんに元通りに復元するわけであり、まさに人間としての奥行きをもたない図形なのである。旅人の一人である仕立屋は目玉をえぐり抜かれてしまうが、痛いとは言うものの、その傷口が化膿するとか具体的な描写はなく、夜露をあてると一瞬のうちに元通りになってしまう。

このような昔話の特徴づける一次元性、平面性(Flächenhaftigkeit)そして図形というようなものは、じつは、われわれがみる夢の特質そのものと言える。このように昔話は抽象的な文体で書かれているがゆえに、さまざまな解釈をゆるす。昔話の深層心理学的な解釈に対して、「こじつけに見える」という批判があるのは事実であるが、『グリム童話』の研究において「民俗学が解明できず、文芸学も『緊張を高めるため』といったような一般的な説明しか加えられない場合にも、心理学はよく納得させてくれることがある⁵⁾」のである。

例えば、「十二人の兄弟」(Die zwölf Brüder, KHM 9)の冒頭で提示されるモチーフ、つまり「今度生まれてくる十三番めの子どもがもしも女の子だったら、十二人

の男の子は殺すことにしよう」というモチーフは、深層心理学の助けを借りないと理解できない。そもそも昔話にはその成立あるいは創造に謎がまつわりついている。ユングは「芸術のうち、その作品創造のプロセスに関わる部分だけが心理学の対象になりうる、しかし芸術本来の本質をなす部分は対象たりえない。後者は芸術とはそもそも何かという問題であり、心理学ではなくただ美学・芸術論の考察の対象である⁶⁾」と論じているが、昔話に論及する際に、もっとも困難を極めるのが、創造のプロセスであり、そこでは深層心理学が有効である。拙論で取り上げる「ふたりの旅人」、「真心のあるフェレナントと真心のないフェレナント」(Ferenand getrü und Ferenand ungetrü, KHM126) などにおいても深層心理学的解釈が有効である。

第3節 『グリム童話』

当論文では、昔話のなかでも、よく知られたドイツの『グリム童話』に収められたものを研究対象とする。まず、『グリム童話』の成立から始めたい。いわゆる『グリム童話』とは、正しくは、『グリム兄弟によって集められた子供と家庭のための童話集』であり、ヤーコプ・グリム (Jakob Grimm 1785-1863) とヴィルヘルム・グリム (Wilhelm Grimm 1786-1859) という兄弟によって集められた童話集である。それは、1812年と1815年に初版の第1巻と第2巻とが出版され、何度も改訂され、その45年後である1857年に第7版が出版された。これが最終版であり、通常われわれが目にするのはこの版である。初版のまえには、当時は出版されることはなかった版、「エーレンベルク版」といわれるものもあり、合計すると8種類の『グリム童話』が存在するということになる。

改訂された理由はさまざまであるが、例えば本論で取り上げる「ふたりの旅人」のように新しい語り部によって、より完成度が高いと判断される昔話をグリム兄弟が聞き取った場合もあり、あるいは「このお話しは子供に読み聞かせるにはふさわしくない」というような読者の声に応じて改訂された場合もある。また昔話そのものが残酷すぎるという理由から削除されたものもあり、逆に新たに見出されてつけ加えられたものもある。初版第1巻は86話、初版第2巻は70話の合計156話からはじまり、最終版では200話となっている。

第2章 「白雪姫」と太母（グレート・マザー）

第1節 初版と最終版との比較

「白雪姫」についてはすでに、初版から最終版にいたるすべての版においてどのように手が加えられたかという、たいへん詳細な研究があり⁷⁾、拙論では、個性化という観点に限定し、かつ初版（1812, 1815年版）と最終版（1857年版）との二つの版の比較に絞って論じることにする。まず、よく知られている最終版の冒頭から見ていこう。

【最終版】

むかしむかし、冬のさなかこと、雪がひらひらと羽のように空から舞い落ちていたとき、ひとりのお后が黒檀のわくの窓辺に座って縫い物をしていた。手を動かしながら、雪を見上げたひょうしに、針で指を突いてしまい、血が三滴雪の中へ落ちた。白雪にはえる赤い色が、とても美しかったので、お后は、「雪のように白くて、血のように赤く、窓枠の木のように黒い髪をした子がほしい」とひそかに思った。それからしばらくして、お后に女の子が生まれた。その子は雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪の毛をしていたので、白雪姫という名をつけられた。この子が生まれてまもなく、お后は亡くなった。

一年たつと、王さまは別の奥方を迎えた。このお后は美しかったが、気位の高い高慢な人だった。美しさで誰かにひけをとることは、我慢できなかった。お后は不思議な鏡を持っていて、その前へ行ってじっと鏡の中を見つめて言った、

「鏡よ 壁の鏡よ

国中でいちばん美しいのは誰？」……⁸⁾

よく知られた書き出しである。いくつかの調査の結果によれば、最も人気のある昔話の筆頭にあげられるものである。しかしグリム兄弟が最初に語り部から聞いた物語は、じつはこのようなものではなかった。次に初版を見てみよう。

【初版】

むかしむかし、冬のさなかこと、雪がひらひらと羽のように空から舞い落ちていたとき、ひとりの美しいお后が黒檀のわくの窓辺に座って縫い物をしていた。手を動かしながら、雪を見上げたひょうしに、針で指を突いてしまい、血が三滴雪の中

へ落ちた。白雪にはえる赤い色が、とても美しかったので、お后は、「雪のように白くて、血のように赤く、窓枠の木のように黒い髪をした子がほしい」とひそかに思った。それからしばらくして、お后に女の子が生まれた。その子は雪のように白く、血のように赤く、黒檀のように黒い髪の毛をしていたので、白雪姫という名をつけられた。

お后は国中で最も美しかったが、その美しさを誇らしく思っていた。お后は鏡を持っていて、毎朝その前へ行って尋ねた、

「鏡よ 壁の鏡よ

国中でいちばん美しいのは女の人は誰？」……⁹⁾

つまり、初版では、お后は死んでいない。このあと白雪姫の美しさを憎み、殺そうとするのは実母なのである。1812年に初版を出版したときに、残酷であるという批判があり、それに配慮して実母から継母に書き換えたのであろうと推測される。もともと実母であったにもかかわらず、継母に書き換えられるのは、「ヘンゼルとグレーテル」(Hänsel und Gretel, KHM15)にも見られる¹⁰⁾。この設定の大きな変更に降は、だいたい同じように書かれている。

ところが白雪姫が七歳になったときに、お后より白雪姫が千倍も美しいと鏡は答えてしまう。お后はねたましく、憎くなり、猟師に、白雪姫を森の中へ連れて行き、「あの子を殺して、肺と肝を証拠に持っておいで」と命令する。しかし猟師はかわいそうに思い、代わりに猪の肺と肝をお后に持って帰る。「料理人はそれを塩ゆでにするように言いつかり、邪悪な女は、それを残さず食べて、白雪姫の肺と肝をたべたつもりでいた」。

白雪姫は森の中で、一軒の小さな家を見つけ、ぐっすり寝込んでしまう。「あたりがすっかり暗くなったころ、この小さな家の主人たちが帰ってきた。それは七人の小人で、鉱石を探して山をうがち、掘っていた」。朝になり、白雪姫は経緯を説明し、七人の小人は次のように答える。「お前がわたしたちの家の面倒をみて、料理をし、ベッドを整えたり、洗濯をしたり、縫い物や編物をしてくれて、それから何でもきちんと、さっぱりしてくれれば、わたしたちのところにいてもいいよ。何も不自由はさせないよ」。

継母に気をつけるように忠告されたにもかかわらず、白雪姫は、白雪姫が生きていることを知り、変装したお后が、「かざり紐 (Schnürriemen)」を売りに来ると家

に入れてしまい、その紐できつくしめられて、息ができなくなり死んだように倒れてしまう。帰ってきた小人が紐を切ると息を吹き返す。次は、お后は「心得のある魔法の術を使って」毒の櫛を作り、売りに来る。「心得のある魔法の術を使って」という表現が最終版ではつけ加えられている。このように版を重ねる毎に、お后は悪者、魔法にされていく。) またしても気を失って倒れ、小人に抜いてもらい正気に返る。三度目は、「毒の強いりんごをこしらえた。外見はとてもきれいで、白くて頬が紅く、一目見たら誰でも欲しくなるようなものだったけど、一口でも食べたら、その人は死んでしまうものだった」。そのりんごを持ってお后は白雪姫を訪ね、りんごを二つに切り、自分は白い方を食べ、白雪姫に毒の入った紅い方を食べさせる。「ひとくち口にいったかと思うと、死んで地面に倒れてしまった」。今度は小人もどうすることもできず、せめて外から見えるようにガラスの棺に入れる。

長い間棺の中に入っていたが、寝ているみたいだった。あるとき、ひとりの王子がやってきて、一目惚れして持ち帰ろうとし、「召使たちが低木につまずいて、棺が揺られて、白雪姫がかじった毒りんごのかけらが喉から飛び出した。(初版では召使が白雪姫の背中を殴る。)するとまもなく眼を開けて、棺の蓋を持ち上げて立ち上がった。生き返った」。そして白雪姫と王子は結婚式をあげることになり、そこへお后も出かけて来て、「もうそのときは、鉄の室内履きが石炭の火にかけてあり、それは、火ばさみで持ってこられ、お后の前に置かれた。それでお后は、その真赤に焼けた靴をはいて、死んで倒れるまで踊り続けなければならなかった。」

第2節 冬

ユング派に属し臨床医であるサイフェルトは「白雪姫」を患者の夢として分析している。¹¹⁾ 読者は、自分があるいは一般的な人が患者として分析を受けているような気持ちで、この論文を読むことになる。したがって白雪姫も二人のお后も小人たちもあるいはガラスの棺も、一人の人間の内部の出来事あるいは過程のイメージ的表現として解釈されている。

サイフェルトの分析の検討に入るまえに、こころについてのスティーヴンズの説明を見ておくことにしたい。「こころ (psyche) のモデルは三層のタマネギのような球として視覚化することができよう。中心にあり、システム全体に影響力を及ぼしているのが自己 (Self) である。三つの同心円のいちばん内側にあるのが集会的 (普遍的) 無意識であり、それはさまざまな元型からなりたっている。外側の円は意識で、その焦点にある自我は (……) システムの周りを回っている。意識と集会的 (普

遍的) 無意識を媒介しているのが個人的無意識で、これはさまざまなコンプレックスからなり、そのコンプレックスの一つ一つがそれぞれ別の元型とつながっている。なぜならコンプレックスとは、元型の人格化であり、元型が個人のこころのなかに現われるための手段であるからだ¹²⁾。

この球が「白雪姫」という昔話でもあり、臨床医ザイフェルトの前にいるクライアントでもあり、そのコンプレックスにあたるものとして、二人のお后や小人たちやあるいはガラスの棺があるということになる。彼はまず次のように書いている。「昔話は、人生におけるきわめて多様な状況や困難にさいしての助言者であり、手本である。それらの背後には、ある特定の著者の個人的見解が潜んでいるわけではないので、私たちは十分に信頼してそうした助言者や手本を見て、自分の進むべき方向を知ることができる¹³⁾。」

この論文の副題は、ドイツ語では「ほとんど失われた生命」である。つまり「白雪姫」の出発点は、「真冬」であることから、生氣のない生彩を欠いた状態、麻痺した感情さらに言うところの死の状態であり、あるいは無気力、うつ状態ともいえるであろう。それを治療し、回復していくことが主題だということである。お后はまったくひとりぼっちで登場している。「通常、昔話はこのような変化と移行と更新の状況に関連しており、逃げ道のない人生の状況で文字どおり死活に関わり、人生を更新するように働きかけることができる答えを含んでいるのである¹⁴⁾」。さらに気づかなければならないのは、多くの昔話の冒頭に現われる状況、すなわち王が登場するものの、その影は薄く、父親として積極的に行動することはなく、実質は不在であることから、ここでは男性性と女性性の問題が明瞭に提出されていることである。ザイフェルトは臨床医として見ている—「女性の発展との関連でみると、王の不在は精神的拡大と更新の必要を示唆している。この問題は多くの主婦と母親たちの知るところであり、また自らにふさわしくない職業に就いている女性たちにとってもまさに当てはまる。そして、男性の発展との関連でいうと、ここに示されているのは女性的態度と同一化している男性であり、あるいはこういうタイプはかなりの年齢になっているにもかかわらずまだ母親とその要求、それゆえに母親やその家庭に対する涙ぐましい罪悪感から解放されたことがない¹⁵⁾」。

さて、一人、窓辺で縫い物をしていたお后が針で指を刺すことにより、物語が動き始める。つまりこころの冷たさを溶かし克服する成長は、ある痛みをとともなう。そこは何年も麻痺していた場所であり、決定的な認識はきわめて苦痛に満ちたものである。「血が三滴雪の中に落ちた」のは生命が流れ始めたことを意味している。

そして娘が生まれるが、これは魂の新しい女性的側面を意味している。例えば献身の能力、優しい感情等である。同時に母と娘の葛藤、すなわち古い原理と新しい生命衝動のあいだの葛藤が起こったことを意味しているのである。

この物語の冒頭にあった三色についてザイフェルトは次のように解釈している。「……黒、赤、白の三つの色のことが述べられているにもかかわらず、女の子は『白雪姫』という名前なのである。その名前にはひとつの色しか保持されていない。新しい生が、死の色であることを我々が知っている雪の色で特徴づけられているそのかぎりでは、致命的である。新しい生が最初から死によって脅かされていることを意味しているとでも言うのであろうか¹⁶⁾」。「白雪姫」という名前には他の二つの色が欠如しており、赤と黒により特徴づけられる変容過程を引き受けないとすれば、見たところ非の打ちようはないが、なんら面白みのない凡庸さだけということになるであろう。

ビルクホイザー=エーリーも三色に論及し、単純化すると、無垢と純潔を表わす白と、生命を象徴する赤と、暗さや悪を示唆する黒と、この三つの統合がこの物語のテーマであると論じている¹⁷⁾。

視線を王に向けると、この王については、妻の死に際しての悲しみへの言及もなければ、自分の娘への気遣いも書かれていないことに気づく。ごく自然な反応が欠如している。これは、人が自分の内なる娘=子供に関心を払わず気遣っていないことを意味している。自らの内なる子供を軽蔑すれば感情は凝固するに至る。また妻に対する言及がないことは自分の内なる女性性に無関心であり、自分の女性的な側面にかたちを与えるという面が不完全なままであることを意味している。

この物語の冒頭にあった「真冬」の状態は、依然として続いている。単に前のお后が死んだ埋め合わせに、新しいお后が来たことになってしまえば、何も変わらないことになる。王は新しいお后を迎えることで、娘すなわち自分自身の幼い生き生きとした感情を封印することになってしまう。新しいお后も、不思議な鏡を覗き込み、自分が最も美しいということを確認するが、言い方を換えると、すべてが従来どおりだということを確認していることになる。ザイフェルトは次のように論じている。「……そのように石のように硬直してしまった人びとや制度がたくさんあり、また人格の特定の部分が凝固することがありうるのである。この昔話は、その過程を扱っている。自分の価値が是認され確認されることを求めることにこだわり、捕えられていること、そして他者を凌駕し、打ち負かそうとし、さらに最も頭がよく、最も上手で、あらゆる関係において第一位の状態であろうとする悲痛なまでの試み、

これこそが、最も重要な問題としてこの昔話によって描かれているのである。鏡のシーンがそもそも中心にあるのである。すでに小さな子どもに明瞭に見て取ることができるこの基本的な欲求をどのようにして回避するかの仕方、人生が決定される。すなわちたえざる不安と『私がいちばん美しい』ことを自暴自棄になってまで求める試みの中で凝固するか、それとも人生を拡大し、更新し、他者と交流し、そして希望のある開かれた未来をもつかである¹⁸⁾。臨床家ザイフェルトの解釈ではあるが、ふだん何気なく読み進めてしまう人物の設定に疑問を抱き、なぜこのような人物設定でメルヘンが構成されているのかを考察すると優れた解釈であることが理解できる。

第3節 太母（グレート・マザー）

そもそも昔話に王やお后が登場するのは、昔の面白いお話し場を設定すると同時に、昔話を好んで聞く子供たちにとって親が絶対的な力を持っているという子供の想像が投影（projizieren）されており、受け入れられやすいからであると考えられる。

新しいお后がきても、はじめの数年間は何事もなかった。お后が恐ろしい継母となるのは、白雪姫が7歳になり、成熟への道を一步踏み出したときからなのである。「『白雪姫』が本質的に扱っているのは、母と娘のあいだのエディプス的な争いであり、小児期であり、それに思春期である。なかでも強調されるのは、よい小児期とはどういうものか、それを越えて成長するにはなにが必要か、ということである¹⁹⁾」とフロイト派のベッテルハイムは論じている。子供にとって、親に嫉妬することは、自分の安全を脅かすことになってしまうので、無意識的に、親に嫉妬することを許せない。そこでその感情が親に投影され、「お后＝母親が私に嫉妬している」という考えにすり変わり、そのことにより劣等感が、防衛的に、優越感に取って代わられるのである。

「母と娘のあいだのエディプス的な争い」と言われているが、エディプス・コンプレックスはそもそも父親と息子との葛藤であり、女性であれば、エレクトラ・コンプレックスと呼ぶ方が適当であろうし、同時に息子と母親との葛藤はオ레스テス・コンプレックスと名付ける方が適当であろう。そもそも子どもが成長し、親離れしていく過程のことであるから、個人的な父親や母親との関係というものだけではなく、子どもの成長にしたがい普遍的に子どもが親にもつ関係の変化と捉えたい。「小此木 ……去勢、親からの性的な誘惑、それから原光景、この三つがウール・

ファンタジーの一番大きな物としてあげられますからね。／河合 その辺のところはユングがグレート・マザーとの関係で提出するものとほとんど同じように感じられますね……²⁰⁾」。

ユングは、人間には生まれつき無意識があり、それには個人的無意識だけではなく、人類に共通の内容や形式のものがあることを発見し、集合的（普遍的）無意識と名づけた。その集合的（普遍的）無意識には、型あるいはパターンがあり、それを元型（Archetypus）と名づけた。つまり元型とは、「こころの動きのパターン」、
「本能行動の様式」である。例えば、日の出の際の太陽に神を見出すこころの動きは世界中で見られる。これを神の元型的体験と呼ぶ。子供が成長の過程で、自分は親の実の子ではないのではないかという疑問・不安を抱くのも母元型と言えるであろう。それを太母（グレート・マザー die große Mutter）と呼んでいる。人の無意識には多くの元型が見出されるが、ユングが重要と考えたものに、太母、自己、影、ペルソナ、アニマ・アニムス等がある。河合は太母を次のように説明している。「先史時代に崇拜の対象となったと思われる地母神の像が、世界のあちこちから発掘されている。これらの地母神の像は、女性の生殖器などが強調され、ときには頭部をほとんどもたないほどのものがあり、母性の『産みだす』機能が著しく重視されている。しかし、これはまた、死と再生の場となる土の神秘を反映して、死者を受け入れる死の女神でもあった。つまり、地母神は同時に生の神であり、死の神なのである。これを示す一例として、日本神話におけるイザナミは、日本の国をすべて産みだした偉大なる母の神であるが、黄泉の国を統治する死の神でもある事実をあげておこう²¹⁾」。

ユング派は、昔話とは、意識的に頭を使って考え出されたものではなく、知らぬ間に生まれ、何度も語られる内に多くの人の手をとおり、最終的な形にととのえられたものであるから、個人的というよりは、普遍的な問題について述べ、それを無意識のうちに典型的な具体的な象徴言語で表現しているものと捉える。無意識のうちに形成される空想と言うことは、夢にたとえることもできる。すなわち人類全体の夢であり、人類全体の問題を扱っているのである。

白雪姫の亡くなった実母は原初の一体性を表わすとビルクホイザー=エーリーは解釈している²²⁾。継母との分裂（軋轢）は、分化の始まりなのである。

そして『グリム童話』のなかで、女性の問題に関わるほとんど全てのお話しに、継母にいじめられる娘のモチーフが出てくる。この暗い母の像と対決することをつうじて娘は成長していくのである。悪しき継母の姿は、自らの一部であり、逃れ難

いものという性格を持っている。だからこそ、継母は繰り返し三度までも白雪姫のまえにあらわれ、死ぬまで痛めつける。この対決は徹底的なものであり、悪いお后が「死んで倒れるまで踊り続けなければならぬ」いほど闘う必要がある。つまりむごいまでの死をむかえるお后とは、白雪姫の内面における太母（グレート・マザー）の完全な解決が必要であることを意味している。

しかし同時にこうした経験がすべて白雪姫の成長、ユングの言葉で言えば個性化（個人が自分自身になること。意識と無意識の要素の統合）に役立っているのである。

別の観点から言えば、継母物語の主人公に対応する女性は、「良い母親」をもっていない、すなわち無意識の本能的生命の中に幸福を見い出すことができず、いわば意識的に女性でなければ女性であることができないと言える。なぜそうなのかの答えが継母物語で語られていることにほかならない。そういう女性は母の中に、生命の源泉、根源的な自らの本質を認めようとしない。このことはその女性の深いところの分裂を意味している。

こうした状況で「白雪姫」の物語は始まり、母娘のあいだにある鋭い葛藤状況を描き、継母の嫉妬に象徴される母娘間の毒すなわちりんごを食べることによってそれを克服し、白雪姫は死に、再生し、変容するのである。

第4節 城からの追放、七人の小人

お后により白雪姫はお城を追放された、すなわち、家を出たことになる。これは次のように考えられる。思春期に入って親からの分離が意識され始めると、子供は、同性の親よりすぐれた存在になりたいという願望と、その願望が成就すると親から報復を受けるかもしれないというアンビヴァレントな感情を持つ。それに耐えられなくなり、内的な動揺から逃れようとして、自分には、別の、もっといい両親がいると夢想することがあり（投影）、それに留まらず実際に家出をする子供もいる。こうした過程は「ヘンゼルとグレーテル」にも書き込まれている。

「白雪姫」にも「赤ずきん」(Rotkäppchen, KHM26)と同じように、無意識の世界では父親を表わすと思われる男性が登場する。お后に白雪姫を殺すように命令されながら逃がしてくれた猟師である。この猟師はお后＝母親の目の届かないところでは、白雪姫＝娘に味方し、母親をごまかしてくれる。これこそ、思春期の少女が、そうあると信じていたい父親の姿である。「赤ずきん」においても狼に呑み込まれてしまい、万事休すのときに、ストーリーとは何の脈絡も無く、突然現われ、救い

出してくれるのは獵師であった。獵師は、森という不気味な空間において、子供が危機に瀕したときに姿を現わし、救ってくれる男性であり、子供が、保護してくれる人物＝父親を投影するのにとっても都合がよいから、童話にしばしば登場するのであろう。

さて、助かった白雪姫は森の中に分け入り、小人の家に住むことになる。「森」は『グリム童話』で「ヘンゼルとグレーテル」、「赤ずきん」、「ふたり兄弟」(Die zwei Brüder, KHM60)等において何度も描かれるものであり、「森は無意識のこころを表わすもっとも重要な象徴のひとつ」である。森の奥は人が知ることができない領域であり、恐怖を与えると同時に食べ物等、人に必要なものを与える領域である。次章で検討する「ふたりの旅人」においても、仕立屋が靴屋によって死に瀕することになるのは、森の中なのである。

小人については、鉦山で鉦石を採掘する仕事に携わっていることから、狭い坑道で働くことで重宝された子どもであったのではなかったかという説がある²³⁾が、ここでは心理的な解釈をしておきたい。

ビルクホイザー＝エーリーは、小人については、白雪姫の保護者の役割を演じており、白雪姫が自らの葛藤を解くのに役立つ「積極的に援助する創造的な精神の力」と考えることができ、複数で現われていることは、葛藤を解くためにいろいろな考えが生じはするが、依然として、全体像を形成し筋の通ったまとまりのあるすじみちは見つけられない状態である、と解釈している²⁴⁾。またザイフェルトは、「小人たちで問題とされているのは、ごく一般的で無意識な自然に内在する力、すなわち善と悪の彼岸にある自然に内在する力を表わしている²⁵⁾」と論じている。

不思議なことに、小人用の小さなベッド等しかも七つと数が限られている住まいに、ごく自然に白雪姫は居場所を見い出すことができる。あらかじめ用意されていたかのようなのである。つまり、みずからの無意識と出会い、その声に従い、生気のない生彩を欠いた状態、麻痺した感情さらに言うところの死の状態から、小人すなわちいまだに無意識的な自然に内在する力に助けられて、徐々に回復していくのである。

ここで、白雪姫は、新たな発達段階に入る。この小人のもとで、白雪姫は、母親の助けを借りることなく、自ら、試練と問題を解決することになり、世の中のいろいろな問題に一人では立ち向かえない女の子から、よく働き、それを喜びとすることを学んだ女性へと成長していく。つまり青年期に入る力を得ていくのである。こうした描写は、「つぐみのひげの王さま」(König Drosselbart, KHM52)や「千枚皮」(Allerleirauh, KHM65)にも見ることができる。同時に小人のもとでの生活は二義

的でもある。すなわち別の視点から見れば、白雪姫は、お后との対決から身を逸らせたことにもなる。厳しい対決のあとに、ひとりきりになった白雪姫には、上述したように自立していこうという面と、「絶望と無力感に受動的に自らを委ねよう」という面とがある。「待つことには二つの種類がある。ひとつは、他人に責任を押し付けてしまう怠惰であり、もうひとつは、時が満ちるまで『待つことができる』ということである²⁶⁾」。こうしたところの動きをユング派は「退行」と呼び、肯定的に意味づけており、この点ではフロイト派とは異なる。これについては、「ふたりの旅人」においてより詳しく検討する。

白雪姫が小人たちのもとに身を隠し、自立への道を模索しているあいだにも、虚栄、名声等の誘惑は押し寄せてくる。変装したお后が三度にわたり現われるのはそのことを意味している。白雪姫の内的葛藤の、意識的には否定された部分を表わす継母が、再び登場し、白雪姫の内的な平和を打ち砕いてしまう。三度もやすやすと継母の誘惑に白雪姫が負けてしまうということは、継母の誘惑が、白雪姫の内的欲望にまさに合致したものであったことを示している。かざり紐、櫛、りんごと三度の誘惑と三度の眠り（退行）を経て、新たな段階に到達し、結婚する用意ができ、パートナーを得ることができるということになるわけだが、まだ道は遠い。虚栄等の欲求は私たちが環境に従属させて、自由と独立を奪ってしまうものである。虚栄とは、たとえば「世間の人は何というだろう」と気にすることである。これが私たちが日常生活で出会う「毒」なのである。そうした考えが私たちを縛りつけ、魂を窒息させる。肯定的で無意識的な自然に内在する力である小人たちでさえ、権力と否定的なナルシシズムの毒から私たちを守りきってくれるわけではない。「この昔話は、権力と自己陶酔が毒であること、私たちを麻痺させ無感動にする毒だということを描いている。そして白雪姫はふたたび死のような状態になる²⁷⁾」。

白雪姫はガラスの棺に入れられるが、まずここにはリュティが指摘しているように「あらゆる金属的なものや鉱物的なものへの昔話の愛着²⁸⁾」を見い出すことができる。グリム童話のなかには「びんのなかの魔物」(Der Geist im Glas, KHM99) や「ガラスのひつぎ」(Der gläserne Sarg, KHM163) を指摘することができる。ガラスとは、はっきりと見えるのに、触れられない—つまり体験しない—ということの意味する。「自分の問題を目の前にはっきりと、『ガラスのように澄んで』見ており、それでいながらそれに心を動かされない人がいる。そのような人が人生の最悪の出来事を話してくれる。(……) しかし、そのような人はいかなる感情や情動も体験していない。(……) ガラスが隔ているのである、自分の感情を見ることはできる、

しかしもはやそれにこころを動かされることはないというわけだ²⁹⁾」とザイフェルトは説明している。この叙述は、神経症（とくに無力性性格者）、うつ病、分裂病の初期などの一症状としてあらわれる離人症の説明として読める。白雪姫は、またしても病状を示してしまう。

さて、この状態を打ち破る人物として王子が現われる。これもヨーロッパの昔話の特徴である。一般化して言うと、主人公である白雪姫は、母や家を否定して、個を確立し、結婚してハッピーエンドを迎えることになる。（しかし例えば日本の昔話「浦島太郎」や中世の説教「山椒太夫」では、主人公は結末で、結婚するのではなく、自分の家に帰り、あるいは親と再会することになり、決定的に異なる結末となる。）ところでこの王子がどこから来たのかは説明されない。王子とは、「生の創造的刺激³⁰⁾」を表わすイメージであり、この刺激は、何年も前に諦めて放棄されたその場所を正確に探し出して、これを取り上げる。ユング心理学では、すでに言及したように、これを「退行」というが、昔の経験、子どもころの外傷や苦痛が再現し、現在に連れ戻されるが、同時に何年も前に制止されたままの生の可能性も新たによみがえる。昔の経験が再び活気づけられ、この今の関心の対象となる。古い硬化した構造が再び柔軟になり、あるいは新たな生によって覆われる³¹⁾。こうしたこころの動きは、人生の形成を目指すのであり、未完成なものを仕上げ、欠けている部分を補完し、不均衡なものの釣り合いをとり、引き延ばされていたものを再び取り上げようとする。無意識のなかで成長してきた潜在的な力と新しい生の創造的刺激が結びつき、白雪姫は新しく決定的な一歩を踏み出すことができるのである。

王子と出会うことができたことは、さまざまな試練を経て、白雪姫が成熟した女性となったと考えて良いであろう。しかしまだ気になる問いが残っている。もし、白雪姫の実母が死ぬことなく生きており、可愛がられ、継母に迫害され宮廷から逃げ出すこともなかったとしたら、はたして白雪姫が成熟した女性になっていたであろうかということである。「このように、まったく劇的なまでに対照的で矛盾している人生の明るい面と暗い面が存在し、それが私たちの歩む道に付き添うのである。私たちは昔話という鏡の中に、そのような状況を回避し、勇気を失わない有益なヒントを見出す。もしそれを回避することを理解していれば、愛の関係における暗い側面もまた、より大きな全体の部分なのである³²⁾」。

対照的な人物として描かれていた新しいお后も白雪姫の婚礼に招待される。例によって鏡に尋ねると、鏡は白雪姫の方が美しいと答えるのであるが、そのとき、「悪い女は呪いの言葉を吐いたが、それからとてとて不安になり、どうしてよいか

わからなくなった」と書かれている。„ihr ward so angst, so angst.“と不安という言葉が二回も繰り返されているが、いままで描かれてきたお後の心理としては、「変だな」と思わせる箇所である。いままでのお後の描かれ方からすると、新たな殺害の方法を考案するところだからである。つまりお後は、本当は自分にも分かっていたのに、変化すべきときに変化することを怠った。内なる声に従わなかった。今となっては、もう遅すぎる。まさにここに不安が生じているのである。お后においては、「お後は拒否された変容を表わしている、言い換えれば、生きられなかった個性化という元型的な可能性を表わしている³³⁾」とザイフェルトは論じている。ベッテルハイムは、エディプス・コンプレックスを克服する難しさが、お后を残酷なまでに殺す場面に描かれていると解釈している。

ところで、フロイトが発達論においてと幼児期を非常に細かく分けているのに対して、ユングは「個性化」あるいは「自己実現」と言い、40歳から死ぬまでの人間の内面的な発達を論じている。こうしたところにもユングとフロイトの心理学の違いを見出すことができる。お後の変容の拒否は、悪の萌芽を宿しているのである。

「白雪姫」では親とりわけ母親から独立する過程が執拗なほどに描かれていた。では次に、独立した大人となったときに、どのような内的葛藤があり、それを自己の成熟にどのように結びつけるのかを「ふたりの旅人」で検討することにする。

第3章 「ふたりの旅人」と影

第1節 あらすじ

「白雪姫」の場合とは異なり、「ふたりの旅人」については第一版と第七版との差を論じることは有益ではない。第一版には「からす」が入っており、これはメックレンブルク出身の兵隊が語ったものをアウグスト・ハクストハウゼンが記録して1813年にグリム兄弟に送付したものである。しかし第五版(1843年)以降は、キール出身の学生であるマインが伝えた「ふたりの旅人」に差し替えられた。比較するにはあまりに異なっている³⁴⁾。

「山と谷は会うことがない。けれども人の子は会うことがある。しかもよい人と悪い人とが。そういうわけで、あるとき靴屋と仕立屋が旅の途中で出会った。仕立屋は小柄な感じのいい男で、いつも陽気で機嫌よくしていた。仕立屋は靴屋が向こうからやって来るのを見ると(……)からかった。(……)ところが、靴屋は、冗

談のわからない男で、酔でも飲んだように、顔をしかめ、小さな仕立屋のえり首をつかまんばかりの顔つきになった」。こうして二人はいっしょに旅を続けることになる。食べるものに不自由をしていたが、ほがらかな仕立屋のほうが稼ぎがよかった。気のいい仕立屋は、「自分の手に入ったものをなにもかも仲間とわけあった」。

そして大きな森にさしかかった。森を抜けて都へ行く道は二つあった。一方は七日かかり、他方は二日しかかからない道であった。しかしどちらの道が近道なのか分からなかった。靴屋は七日分のパンを持ち、仕立屋は二日分のパンしか持たなかった。二人が選んだ道は、七日かかるほうであった。仕立屋は、空腹に苦しみ、五日めに、靴屋からパンをもらうことになる。しかし靴屋は、そのかわりに仕立屋の右目をくり抜いてしまう。ついで七日めには再度パンと交換に左目をえぐり抜いてしまう。

森をやっと出て、靴屋は仕立屋を首つり台に置き去りにして去ってしまう。その首つり台には二人の罪人が宙づりになっており、それぞれの頭のうえに鳥が一羽ずつとまっていた。ひとりの罪人がもうひとりの罪人に、首つり台から垂れた露で目を洗うと、目が見えるようになるとしゃべっているのを耳にし、そのとおりにして目が元通りになる。仕立屋はまた陽気に都に向かうが、まず茶色の子馬に出会う。子馬は、まだ小さすぎて、仕立屋を乗せると背中が折れてしまうから助けてくれ、いつか恩返しをするときがくるでしょうと言ひ、放してもらう。次いでこうのとりに出会い、食べてしまおうとするが、「わたしは神聖な鳥だ。害を加える者などだれひとりいない。わたしは人間に大きな利益をもたらしているのだ。生かしておいてくれたら、いつかまたお礼をすることがあるだろう」と言われ、やはり放してやる。さらに子鴨を食べようとするが、親鴨に命乞いをされやはり放してやる。最後に野蜂の蜂蜜も同じように食べることなく、都に到着する。

仕立屋はよい働き口を見つけ、評判をとり、とうとう王さまがおかかえ仕立屋にした。「ところが、世の中は、みょうなもので、まえに仲間だった靴屋も、同じ日におかかえの靴屋となった。(……)靴屋は(……)やましさがうずいた」。「あいつがおれに仕返しをするまえに」と靴屋はひそかに考えた。「落とし穴を掘ってやらねばならん」。(……)靴屋は王さまに告げ口をして仕立屋を貶めようとする。まず、靴屋によって「王さま、仕立屋は高慢なやつで、ずっと昔になくなった金の冠をとりもどしてみせる、と大きなことをいっております」と告げられてしまい、王さまから、持ってこないと都を追放にすると申しつけられてしまう。無理とあきらめ都をあとにしたが、以前救ってやった親鴨に出会い、わけを話すと、鴨は水底に沈んでいた

王冠を拾いあげてくれる。次に靴屋は、「王さま、仕立屋はまたまた増長して、大きなことを言っております。王さまのお城をそっくりまねて、蠟で模型をつくってみせる（……）というのです」と告げられてしまう。今度は女王蜂がそっくりなものを作ってくれて救われる。三度目は「王さま、城の中庭にはどうやっても水が湧き出しそうもない、という話が仕立屋の耳に入りました。あの者は、水晶のようにすんだ水を、中庭のまん中に人の高さほども立ちのぼらせてみせる、と大きなことを言っております」と言われてしまう。できない場合には首を切ると王さまに言われ、仕立屋は逃げ出すが、以前逃がしてやった子馬に出会い、成長した馬は仕立屋を乗せて、城の中庭に入り、みごとに水晶のように清らかな噴水を吹き上げさせる。しかし四度めの試練が待ち構えていた。「王さまには娘がたくさんあって、みんな負けず劣らずきれいだったが、息子はひとりもいなかった」。意地の悪い靴屋は、四度目にまた王さまのところに行って言った、「王さま、仕立屋はまだ高慢がやみません。今度は、その気になれば、王さまに、ご子息をひとり空から運ばせることができると、大きなことを言っております」と告げられてしまう。王さまは成し遂げれば、いちばん上の娘を妻として与えようと言うが、無理であると思った仕立屋は都を出て行くことにする。すると昔なじみのこうのとりに出会い、こうのとりはお后のもとにかわいい王子を連れて来る。お后は嬉しくて夢中になり、仕立屋は、一番年上のお姫様と結婚した。

靴屋は、都を追放になり、首つり台に着き、二羽の鳥に目玉を突つき出されて、死んでしまった。

第2節 影、補償

冒頭に「山と谷は出会うことがない。けれども人の子は出会うことがある。しかもよい人と悪い人とが」とある。絶えずつかず離れずともに行動する二人の旅人が描かれている。ありえないほど対照的なこの二人は、普通であれば、一人の人物がその両方を混ぜ合わせてもつ性格を、純粹に分離したかのように思われてくる。不思議な昔話であり、奇妙であると同時に興味深い設定である。しかし『グリム童話』においてこのような設定は他にも散見されるのである。例えば「真心のあるフェレナントと真心のないフェレナント」は題名からして、フェレナントという一人の人物の真心のあるところの動きと真心のないところの動きとが、強調され、物語化されたように思われる。また瓜二つで、危機に陥ったときに他方を救う補償的存在として描かれている「ふたり兄弟」にも同じ設定が見られるのである。プレヒトの『セ

チュアンの善人』における、シェン・テとシュイ・タ、またスティーブソン『ジキル博士とハイド氏』がすぐに思い浮かぶことであろう。ただ注意しておきたいのは、創作された小説や演劇ではなく、「子どもと家庭」のために語り継がれてきた昔話に同様の人物設定が見られることである。繰り返すことになるが、昔話の起源には諸説あり、その起源に人々が見た強烈な印象をとまなう夢があるとすれば、人々がこのような問題を無意識に抱えていることを意味するのである。「夢は単なる空想ではなく、無意識的な発達の自己表出である³⁵⁾」とユングは論じている。

仕立屋と靴屋、真心のあるフェレナントと真心のないフェレナント、この組み合わせはありえないほど対照的であるとすでに述べたが、誰しも、明るくて、善意に溢れた前者に共感を持ち、暗く、意地が悪く、悪意に満ちた後者には、なりたくはないと思うであろう。このように自分はこういう人間ではありたくはないと思う側面を、じつは誰しももっており、それは意識的に抑えこんで現われないようにして生きているのである。こうした面を、ユングは影 (Schatten, shadow) と名付けた。人格の劣等な部分を「影」とよび、それは、心理療法医が個人的無意識の人格化として必ず出会う存在であると言われている³⁶⁾。

第3節 首つり台

首つり台も『グリム童話』ではしばしば描かれるものの一つである。「こわがることを習いに出かけた男の話」(Märchen von einem, der auszog, das Fürchten zu lernen, KHM 4), 「いばらのなかのユダヤ人」(Der Jude im Dorn, KHM 110), 「青い明り」(Das blaue Licht, KHM 116) 等に見出せる。

フランツは、「その首つり台には二人の罪人が宙づりになっており、それぞれの頭のうえに鳥が一羽ずつとまっていた」という表現の「宙づりになっており」という言葉に注目している。ただしドイツ語の hängen が、英語の suspend と訳されている。「一つの表現がこの状況をある視点から説明している。宙づりになっており(サスペンション)に論及する。内的な心理的葛藤があまりもひどくなると、生命が宙づりになる。二つの対極が拮抗し、イエスとノーの力が同じ強さになると生命は進んでいけなくなる。(……)そこで宙づりになっておりという状態になる。それは生命の流れの完全な停止で、耐え難い苦難を意味している。葛藤に途方に暮れ、何事も起こらないのは最も苦痛の多い苦難の形である。靴屋が、二人の罪人の宙づりになっている所で仕立屋を盲にしたとき、それは生命の過程のとまった宙づりになっている葛藤を象徴している、と言えるかもしれない³⁷⁾」。繰り返しになるが、

このメルヘンの冒頭にあった「山と谷は出会うことがない。けれども人の子は出会うことがある」という奇妙な表現からかもし出されているように仕立屋と靴屋とを一人の人間の裏表、無意識と意識というものと考え、首つり台の下で目を抉りだされた痛みと空腹とで寝込んでしまい意識を無くしてしまった仕立屋の状態は、退行 (Regression) と理解することができる。退行について、すでに論及したようにフロイトは否定的現象と見なしたが、ユングは退行期における治療的側面、前進 (Progression) に先立つ刷新と評価した。つまりある人物のなかにある仕立屋と靴屋という内的な葛藤が外界への適応を妨げて、「退行」し、首つり台の下で寝込んでしまったわけである。しかし同時にこの退行により再活性化された無意識の内容は、新たに適応する力を含んでいるのである。翌日、目を覚ました仕立屋は、からすの言葉を理解し、再び目が見えるようになる。

また河合は「二重人格はまったく異常な現象であるが、それもよく考えてみると、第二人格は第一人格を補償する意味をもっていることがわかるのである。人間のここは二重人格という異常な現象を呈してまで、その全体性を回復しようとする傾向をもつということもできる」³⁸⁾と論じている。靴屋に見捨てられ、首つり台の下で寝込んでしまう仕立屋には、もはやこの補償 (Kompensation) する力もなく、退行に陥ったと理解できる。ユングは、聖書のヨナに言及しつつ次のように論じている。「くじらにのまれるヨナのたとえ話が、この状況を的確に再現している。人は幼児期の思い出に沈潜し、そのことによって現在の世界から消え失せる。一見、最も深い暗闇に落ちこむようだが、しかしそのとき彼岸の世界の思いがけない幻をみる。そこでみる『秘儀』は、原初的イメージの宝庫である。これはだれでもが人類の贈り物として持って生まれてくるもの、本能特有の生得の形式の総体である。この『可能性としてありうる』ところ (プシュケー) をわたしは集合的無意識と名づけた。この層が、退行してきたリビドーによって活性化すると、生の更新と同時に生の破壊の可能性が生じる。首尾一貫した退行は、自然な本能の世界との再結合を意味する。それはまた形式的すなわち精神的な見地から言えば原初的素材を表わす。もしこの素材が意識によって受け止められることが可能ならば、この素材は復興と新しい秩序をもたらすだろう³⁹⁾」。ヨナと同様に、暗黒の闇の中に陥り、そこから目覚めて、視力を回復し、王さまのおかかえ仕立屋になり、王さまが出す難題を次々と解決して行く仕立屋の活躍の背後にユングのいうこのころの過程を見出すことは容易である⁴⁰⁾。

第4節 仕立屋、靴屋

仕立屋もしばしば昔話に登場する。アンデルセンの「はだかの王さま（皇帝の新しい着物）」に登場する仕立屋も有名なものであるし、『グリム童話』のなかにも、「勇ましいちびの仕立屋」（Das tapfere Schneiderlein, KHM 20）、「天国の仕立屋」（Der Schneider im Himmel, KHM 35）^{41）}、「〈おぜんよ、したく〉と金出しろばと〈こん棒、出ろ〉」（Tischchen deck dich, Goldesel, KHM 36）^{42）}、「親指太郎の旅歩き」（Daumerlings Wanderschaft, KHM 45）^{43）}「りこうなちびの仕立屋（Vom klugen Schneiderlein, KHM 114）」、「わぎのすぐれた四人兄弟」（Die vier kunstreicher Brüder, KHM 129）^{44）}、「大男と仕立屋」（Der Riese und der Schneider, KHM 183）がすぐに目につく。

勇ましいちびの仕立屋は、その名のとおり、ちびであるにもかかわらず、知恵と策略をもち、大男や獣を退治し、王さまになってしまう。「〈おぜんよ、したく〉と金出しろばと〈こん棒、出ろ〉」では仕立屋の三人の息子が主人公となっているが、三人はそれぞれ優れた指物師、粉引き、ろくろ細工師となりえている。親指太郎は、仕立屋の息子で、親指ほどの大きさしかないが、勇気があり、次から次へと襲いかかるすべての困難から逃げ果せてしまう。りこうなちびの仕立屋は、トゥーランドットのような高慢な王女の謎を解き、獐猛な熊を手なずけ、王女と結婚してしまう。わぎのすぐれた四人兄弟では、四人ともに優れた技を身につけるが末の弟は仕立屋となり、大活躍する。「大男と仕立屋」では、天まで届きそうな大男を、おおきなほらをふくことにより仕立屋は震え上がらせてしまう。

例外はないとはいえないが、昔話において仕立屋とは、体格には優れないが、りこうで勇ましい人物として描かれている。

いっぽう靴屋は、「小人たち」（Die Wichtelmänner, KHM 39）、「びやくしんの木の話」（Von dem Machandelboom, KHM 47）、「プフリーム親方」（Meister Pfriem, KHM 178）、「水牛の皮の長靴」（Die Stiefel von Büffelleder, KHM 199）に登場している。仕立屋ほどには描かれてはおらず、プフリーム親方は靴屋で、何についても悪口を言う人物で、「ふたりの旅人」に登場する靴屋に似てはいるが、他の昔話の靴屋は、異なった性格で描かれており、「靴屋」という職業は、「仕立屋」とは異なり、職業だけで、ある特性を意味するものではないと言えよう。

靴については、フランツの詳しい説明がある。フランツはまず、靴の象徴性に関して性的な面が、フロイト派により主張されているが、それは顕著な面ではないと批判している。その理由はこれらの昔話に語られている社会階層の人々には性につい

てより直接的に話すものであるからとしている。そうではなく「靴がたんに足を包み、それによってわれわれが大地に立つという仮説から出発すると、靴は立場、あるいは現実に対する態度である⁴⁵⁾」と解釈している。その理由として、成人した際に、ドイツでは「子どもっぽい靴を脱ぐ」と言い、スイスでは「父親の靴に入り込む」という慣用句があることを挙げている。つまり靴屋とは、とりわけ現実に対する態度に関わる人物であると語っている。大きな森を前にして、長い道を選んでしまう可能性も考慮して、七日分のパンを持っていくところは、まさに現実的な対応である。

第5節 王さまと自己

このメルヘンで最高の盛り上がりを見せるのは、仕立屋と靴屋が王さまに仕えてからである。靴屋が、この王国が抱えている問題を指摘して、仕立屋がその課題に応えていくところである。あらすじで紹介したように、「ところが、世の中は、みょうなもので、まえに仲間だった靴屋も、同じ日に、おかかえの靴屋となった」とある。ここは王さまと仕立屋と靴屋がいるように読めると同時に、王さまが抱えている問題が、王さまのこころのなかで靴屋と仕立屋という姿を借りて取り上げられていると読めるのである。

こうしたところをユングは「自己 (Selbst, self)」と「自我 (Ich, I)」と二つの言葉を区別して用い、説明している。「自己とは、意識的自我より上位にある偉大なものである。それは意識的ところだけではなく、無意識的ところをも包括している、それゆえ、いわば、われわれもまたそうであるような一個の人格である。(……)意識的自我を補償する無意識過程は、こころ全体の自己調節に必要なすべての要素を含んでいる⁴⁶⁾」。王冠が紛失した状態であること、解釈すれば、揺らぎかけた王権を修復する必要に迫られていることを無意識が告げ、それを意識的に行動に移し、それにともない掌握しきれていない城の内部を、すなわち蠟細工の城で象徴されるように、王さまを取り囲む政治的諸制度を見直そうとする等々と理解することができる。このメルヘンに登場する王さまの役割について考察したが、そもそも一般的に『グリム童話』所収の多くのメルヘンに現われる王さまとは如何なるものであるのか考えておこう。

この王国と同様に、他の多くのメルヘンの王国も、変革が求められている状態からメルヘンが開始されている。前章で検討した「白雪姫」においても、やっと姫が生まれると同時にお后が亡くなり、新たなお后が訪れるというところから始まって

いた。さらに「忠義なヨハネス」(Der treue Johannes, KHM6), 「いばら姫」(Dornröschen, KHM 50), 「ふたり兄弟」(KHM 60), 「三枚の鳥の羽」(Die drei Federn, KHM 63), 「千枚皮」(KHM65)等々でも同様の設定である。「忠義なヨハネス」と「三枚の鳥の羽」では、王さまは年老いており、王宮には女性が不在と思われ、王子はお姫さまを探さないかぎり、その王国は衰退してしまう状況にある。「いばら姫」と「白雪姫」では、やっと王女が生まれ、王子の登場が待ち望まれている。河合の言葉を借りれば、メルヘンは「規範性の崩壊⁴⁷⁾」をまえにして開始されていると言えよう。フランツは次のように論じている、「自己のあらゆる力強い象徴は(引用者註、王さまをさす)、対立物を結びつける。しかしそれが力を失うと、もうそのようには機能せず、対立物は分裂し始める。この話の王さまが、実際にはそうでないのだが、もし完全に強力であったならば、彼は靴屋と仕立屋を和解させ、彼らが争ったりせず協力するように治めることができたろう—彼らが対立したことは、王さまの弱さを証明している⁴⁸⁾」。こころの動きの統合を失調しつつあると言い換えることもできるであろう。

「この『何ものか』は、われわれには見知らぬものであり、しかしごく身近なものであり、まさにわれわれ自身でありながらそれと認識できない。それはまた秘密に満ちた生得の素質の仮想される中心点であるので、動物とも神々とも、鉱物とも星々とも、親和性を要求することができ、その際にわれわれに不思議な思いもさせず、それどころか不同意の気持ちを起こさせない⁴⁹⁾」。仕立屋にとり、新たな命令を下し、自らがそれを実行するメルヘンの展開を強いる王さまは、まさにユングが説明する「自己」のように読める。「ふたりの旅人」において、この王が無くなっていった王冠を取り戻すことは、王国すなわち王さまのこころの統合と理解できる。

第6節 「ふたりの旅人」の特異性

先程も言及した「真心のあるフェレナントと真心のないフェレナント」では、真心のあるフェレナントは、王さまの命令により、花嫁を連れて来て、結婚させるのであるが、そのあとに奇妙な表現がある。「ところがお后は王さまが好きではありませんでした。というのは王さまに鼻がなかったからです⁵⁰⁾」。実際に鼻がないのか、あるいは性的に不能であることを暗示しているのか、いずれにせよ王さまの代わりに真心のあるフェレナントが王さまとなる。貧乏な両親から生まれたフェレナントが王さまとなるのである。同様に、「ふたり兄弟」、「勇ましいちびの仕立屋」そして「りこうなちびの仕立屋」においても主人公は王女と結婚して王さまとなること

が約束されている。

しかし「ふたりの旅人」では、仕立屋は、こうのとりの助けを借りて世継ぎを運んできたことから容易に推測できるように、世継ぎとはならない。

また、助けた動物たちによって、主人公が恩返しをしてもらうという挿話も、通例は3回が大半であるのに、ここでは4回となっていることも 特異な例である。フ란ツは、多くの場合は4回目として、主人公が王さまとなることがあると理解すべきであり、「ふたりの旅人」では、すでに4回目の恩替えしで完結してしまっており、世継ぎとはならなかったと理解している。

第4章 おわりにかえて

「白雪姫」と「ふたりの旅人」を検討してきた。この二つのメルヘンは、すでに多くの他のメルヘンに言及してきたことから分かるように、『グリム童話』によく見られるものである。

「白雪姫」では、娘が自立し、独立して生きていく過程で生じる（母）親離れが、継母のお后という印象的な姿で描かれていた。親離れ、子離れは、古より心理的に困難なものであり、その苦勞が描かれている。成長の過程で困難に直面した白雪姫は、七人の小人の家に避難し、心理的に言えば、退行して、今まで疎かにしてきた成長の過程を補償していったのである。

そして成長した人間にとり、意識的な生活とともに同時進行している無意識の世界があるということが、仕立屋と靴屋という二人の旅人を描いたメルヘンできわめて分かりやすく描かれていた。ふたりの旅人は森のなかで、まさに命をかけて対決し、仕立屋は死に瀕したのであった。森とは、『グリム童話』のさまざまな物語が展開する舞台であり、同時に未知な領域であり、人はその深みには行って行けば行くほどに通常の意識とは別の層で生きることになる場所である。こうした森での対決を経て、死に瀕し、退行し、蜂や馬たちの力を我が物にすることにより、今までの自分には不可能であった様々なことを可能にする力を統合したと言えよう。そして王宮にたどりつき、王さまのもとで失われた王冠を発見し、世継ぎをもたらし、王さまという人物を王さま足りうるようにした。このように昔話が成立した過程はなかなかたどれないものではあるが、そこに多くの人々が自己実現しようと、あるいは個性化しようとした過程がみごとに象徴的に描かれていることをわれわれは理解することができるのである。

註

- 1) Carl Gustav Jung, Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten. In C.G.Jung-Taschenbuchausgabe in elf Bänden. Herausgegeben von Lorenz Jung auf der Grundlage der Ausgabe „Gesammelte Werke“. (Deutscher Taschenbuch Verlag, 2001) Vgl. S. 31.
- 2) Jung, a.a.O., S.23.
- 3) 『グリム童話』に収められている各メルヘン(童話)には、最終版の掲載順序が整理番号としてつけられ、KHMと番号で示される。
- 4) Max Lüthi, Das europäische Volksmärchen, Francke Verlag München. (UTB 312. 1976) S. 5.
- 5) 野村法 『グリムの昔話と文学』(ちくま学芸文庫) 55頁。
- 6) Carl Gustav Jung, Über die Beziehungen der analytischer Psychologie zum dichterischen Kunstwerk. In Seelenprobleme der Gegenwart. In C.G. Jung-Taschenbuchausgabe in elf Bänden. Herausgegeben von Lorenz Jung auf der Grundlage der Ausgabe „Gesammelte Werke“. (Deutscher Taschenbuch Verlag, 2001) S. 31.
- 7) 小澤俊夫 『グリム童話考—「白雪姫」をめぐって—』(講談社学術文庫) 181頁以下参照。
- 8) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 7.Auflage. (Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1989) S.297f.
- 9) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 1.Auflage. (Vandenhoeck & Ruprecht in Göttingen 1996) S.238f.
すでに多くの優れた翻訳があるが、初版と最終版との違いを明瞭にだすために、新たな翻訳とする。ただしタイトルは野村法氏による『決定版完訳グリム童話集』(筑摩書房)に倣うこととする。
- 10) 詳細は、拙論「『グリム童話』と日本の昔話の比較—『ヘンゼルとグレーテル』・『手なし娘』—」(「駿河台大学論叢 第31号」2006)を参照。
- 11) Theodor Seifert, Schneewittchen -Das fast verlorene Leben-. (Kreuz Verlag, Zürich, 1983)
ザイフェルト(1931-)はシュトゥットガルトの心理療法クリニックの所長を務めると同時に、ドイツ語圏で出版された「昔話の知恵(Weisheit im Märchen)」双書全体の監修にもたずさわっている。
- 12) Anthony Stevens, Jung. A Very Short Introduction.. (Oxford University Press 1994)

p.48.

- 13) Seifert,a,a,O., S. 9.
- 14) Seifert,a,a,O., S.41.
- 15) Seifert,a,a,O., S.43.
- 16) Seifert,a,a,O., S.70.
- 17) Vgl. Sibylle Birkhäuser-Oeri, Die Mutter im Märchen. (Verlag Adolf Bonz, Stuttgart, 1976) S.58f
- 18) Seifert,a,a,O., S.91.
- 19) Bruno Bettelheim, The Uses of Enchantment. (Penguin Books 1991) p.202.
- 20) 『フロイトとユング』 小此木敬吾+河合隼雄 (思索社) 1978, 108頁。
Vgl. Stevens,a,a,O., p.22.「……ユングには、二つのフロイトの基本的前提がどうしても受け入れがたかった。一つ目は、人間の動機はすべて性的であるということ、二つ目は、無意識はまったく個人的なものであり、その個人に特有のものであるということ」。
- 21) 河合隼雄『昔話の深層 —ユング心理学とグリム童話』(講談社+α文庫) 47頁以下。
- 22) Birkhäuser-Oeri,a,a.O., S.61.
- 23) 高橋義人『グリム童話の世界 —ヨーロッパ文化の深層へ』(岩波新書) 152頁参照。
- 24) Vgl.Birkhäuser-Oeri,a,a.O., S. 66.
- 25) Seifert,a,a,O., S.108.
- 26) Seifert,a,a,O., S.103.
- 27) Seifert,a,a,O., S.129.
- 28) Lüthi,a,a,O., S.28.
- 29) Seifert,a,a,O., S.123.
- 30) Seifert,a,a,O., S.128.
- 31) Vgl. Seifert,a,a,O., S.129.
- 32) Seifert,a,a,O., S.133.
- 33) Seifert,a,a,O., S.141.
- 34) 小澤俊夫, 前掲書, 309頁参照。
- 35) Carl Gustav Jung, Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten. S.18.
- 36) Marie-Louise von Franz, Shadow and Evil in Fairy Tales. (Shambhala, Boston & London 1995) S.3f.「もし心理学について何も知らない人が分析にやって来て、分析家がその人の気づいていないところの背後に、ある過程のあることをその人に説明しようとしたとすれば、その過程がその人の影である。(……) 人格の影の領域を掘り下げて、

いろいろな側面を探求しはじめて、しばらくして、夢のなかに夢を見ている人と同性の無意識が擬人化された人物として現われるのである。しかしその後で、この人は、未知の領域にはまだアニマ（あるいはアニムス）とよばれるもう一つ別の反応のかたまりのあることを発見する。それは感情、ムードそして思いつきなどを表わすものである。また自己という概念も用いることもある。実践的な目的のために、これら三段階以上にわけたことをユングは必要と思わなかった。」

37) Marie-Louise von Franz, a.a.O., S. 23.

38) 河合隼雄, 前掲書, 124頁以下。

39) C.G. Jung, *Symbole der Wanderung. Analyse des Vorspiels zu einer Schizophrenie.* (Rascher Verlag, Zürich, 1952) S.703.

40) 「退行」と「内向」および「進行（前進）」と「外向」について、ここでは深く立ち入ることは避け、簡単な説明にとどめたい。『フロイトとユング』（68頁以下）においても取り上げられている。「河合 そもそもリグレッション、退行という概念でユングはリビドーの無意識の流れをさしています。リビドーが自我の方へ流れているのをプログレッション、進行とよんでいますね。」「河合（……）内向という場合は自我の支配下におけるエネルギーと考えたらわかりやすいのではないかと思います。」「河合（……）自我の支配下にあるエネルギーが外的なものへ向かうのが外向で、退行というのは、自我の支配下を越えてしまった一つの現象として見たらわかりやすいのではないのでしょうか。」

ユングは、「意識が、無意識の補償しようとする傾向に恐れを感じると、無意識は蛇の姿をとる。退行の場合はたいていこうなる。しかし補償を原則的に肯定するひとは退行せず、内向によって無意識に歩み寄り」（*Symbole der Wanderung*. S.662f.）と論じている。

41) この仕立屋だけは、他の昔話とは異なり、成功をおさめない。

42) 仕立屋の三人の息子が主人公である。

43) 主人公である親指太郎は、仕立屋の一人息子である。

44) 四人兄弟の末っ子が仕立屋である。

45) Marie-Louise von Franz, a.a.O., S. 24.

46) Carl Gustav Jung, *Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten.* S.63.

47) 河合, 前掲書, 170頁

48) Marie-Louise von Franz, a.a.O., S. 19.

- 49) Carl Gustav Jung, Die Beziehungen zwischen dem Ich und dem Unbewußten. S.122.
50) Kinder- und Hausmärchen gesammelt durch die Brüder Grimm. 7.Auflage. (Wissenschaftliche Buchgesellschaft Darmstadt 1989) S.599f.

本研究は2008年度駿河台大学特別研究助成費の補助を受けた。あらためて謝意を表したい。